

第三章 人々のつきあい

第一節 人々のつきあいとくらし

福生に住む人々が、その生活をおくるうえでもっとも大切にしてきたのは、今日と異なり生活基盤たる地域であった歴史がある。畑作農業などを同一の生業としながら、地域を中心にしての濃密な社会関係が存在していたのである。そしてこの地域をムラという意識でとらえてきた歴史がある。今日において、急激にすすむ都市化の波のなかにあっても、ときとして生活文化の合流に根ざすムラ意識が表に出てくることがある。では、このムラ意識とはいかなるものか。人々の地域のつきあいに重点をおいて考えてみる。まずムラ意識なるものの、母体となるムラとはどのようなものかをごく簡単に定義しておきたい。福生市は、旧福生村と旧熊川村より行政的に構成されている。旧福生村は、加美・長沢・永田・志茂・福生分牛浜地区に分けられ、旧熊川村は熊川分牛浜・鍋ヶ谷戸・内出・南地区に分けられる。こうした地区は、近世における幕府領ないし私領の行政村の小名にほぼ相当するとともに、現在の町内会の母体ともなっている。こうした地区が、ムラと称されることが多く、地理的・社会的構成単位となっているのである。

1 ムラのつきあい

ムラは、その構成において自治的結合をなし、区長のもと年番そして組長によってまとめられてきた。この自治的結合に行政がかぶさってきた歴史がある。区長は、ムラの自治すべての責任者であり、祭礼の責任者でもあったし、行政がかぶさってくると役所からの窓口にもなった。年番は、ムラによってその役割が少しずつ異なるが、区長の補佐とともにムラの自治全般に渡っての企画・調整の仕事を担ってきた。組長は、クミアイ（組合）のまとめ役ないし世話役の役目を担ってきた。この自治制は、ほとんどそっくり今日の町内会の組織に受けつがれている。

こうしたムラの自治を担う役員は、正月七日におこなわれるウタイゾメで選出されるきまりであった。ウタイゾメは、今日総会といわれているが、ムラの最高議決機関である。ウタイゾメにおいては、役員の選出・年間行事計画・予算・決算の承認がおこなわれるとともに、ムライリの場合でもあった。議事の終了とともに酒宴となるが、このときに各家の一五歳に達した長男・シンタク（分家）に出た者・他所から移転してきてムライリを認められる者が、酒一升を出して皆に承認されると、ムライリがおこなわれた。ことにI家の長男の場合は、一五歳で一人前とみなされ、名ピロメがおこなわれ、ウタイゾメでムライリがすむと父親に代ってムラの諸事に出ることが許されるようになった。また、他所からの移転者はすぐにはムライリは許されず、五〜一〇年かかるのが通例であった。これは一体何を物語るのだろうか。もともとムラの人々は畑作農業などを中心とする同一の生業者であったが、戦後における都市化の流れのなかでムラの多くの人々と異なる生業者が移入してきたのである。これによって農業者を基盤とするムラのつきあいが維持できるかが問題となり、ここにきびしいムライリの条件が出されてくることになったのである。

2 ニワバのつきあい

福生に古くから住む人々は、自分の住む地域をムラととらえるとともに、ニワバととらえる意識をもっている。そして、ニワバはムラとほとんど重なる範囲にあるが、特徴的なことは稲荷講の結成単位となっていることと、膳枕倉ぜんまくらぐらを所有していることである。

ニワバという言葉は、神奈川県・東京都に分布し、ムラの最小限の自治組織の単位を指したり、ムラの区画を指していることが多く、ことに注目されるのは本家ないし草分けの家を核に同族がまとまっている傾向にあるといわれる。福生でのニワバは、その構成のされ方は各地区によって微妙な違いがあるが、基本的にはムラニワバといえる。ニワバなる言葉が文献に表われてくるのは、古いところで鍋ヶ谷戸の野島家文書の「安永二癸巳八月日」の「神光仏言夢物語写」で、「馬喰ヶ谷戸天神社壺ヶ所、是ハ庭ばの氏神、上屋敷ニ神明社壺ヶ所、同庭ばの氏神、原ヶ谷戸ニ稻荷明神社壺ヶ所、同庭ばの氏神——略——」と記載されている。馬喰ヶ谷戸・上屋敷は、現在において加美第二町会を構成しているが、二つが合併してできた町会であるとともに、別々に膳枕倉を所有してきた歴史を持つし、原ヶ谷戸も同じである。現在の町内会の構成のされ方とムラ・ニワバとの関係を整理してみると、ムラニワバニワバ町内会のタイプと、ムラニワバがいくつか合併して町内会を構成するタイプ、それにムラがいくつか合併して町内会が構成されるの下にニワバが再編成されたタイプになるのではなからうか。また、ムラニワバの基本が崩れていったのは、ムラに新しい移住者が入ってくるなかで、ことにニワバのつきあいの中心をなす稲荷講と膳枕倉の使用のなかで、稲荷講のもつ稲荷免といった経済価値と膳枕倉の利用と維持管理をめぐって権利として強調され、ホンコ（旧来からの住

人）対新入者の区分がなされ、ムライリはできてもニワバイリはできないとなったのではなからうか。こうした条件のなかで、ムラニワバといった基本が崩れ、さらに行政的な町内会区分の編成が拍車をかけたといえる。一例をあげると、南地区では昭和三〇年代（一五五〇）末において、町内会ニムラの戸数が七二、ニワバが五〇、ホンコが四七と考えられ、ムラニワバの基本的構成員が四七戸で、新しくニワバイリ（ムライリ）できたものが三戸あったことになり、あとの二二戸はいまだという風に考えられる。

さて、ムラニワバといえるが、つきあいのなかで、ムラのつきあいとニワバのつきあいとが分かれるのであろうか。ムライリに対してのニワバイリ、ムラの年番に対してニワバの年番と区別されるのであろうか。ここに注目されるのは、つきあいにおいてもっとも重視される葬式の手伝い、ことに穴番（墓穴掘りと棺かつぎ）がニワバの仕事であることである。多くの地域において、葬式の互助はムラのつきあいであることが多いが、あえてニワバのつきあいと強調されるのは、ムラニワバでなくなったためではないかと考えられる。もう少し言うと、ムラがその内部において経済的な互助組織を結成したときにムラがニワバとなったのであり、それ以後にムラに加入しようとした家に対して、互助の権利関係をめぐって相克が生れ、ムラニワバの図式が崩れ、ニワバがことさら強調されるようになったと考えられる。ニワバの特徴を示す稻荷講や膳枕倉の所有も、ほとんど近世末にあたり、資料においてもニワバの用語が表われてくるのである。近世末の動乱期に、膳枕倉の共有という互助組織としての稻荷講が結成されていたのではないかと考えられる。農家のニワ（ニワバ）が作業の場であることからすると、互助の場としてのムラのニワ（ニワバ）が成立したと考えられるのである。そして明治以降においてシンタクの創出や移住者の増加のなかで、互助の権利関係をめぐってホンコ対新居住者の対立が、ムラニワバを崩すとともに、いっそうニワバの存在を強調さ

せたといえる。それは、ムラ・ニワバの下部組織であるクミアイにもよく表われており、今の町内会のクミとニワバのクミ（モトツクミ）とが、ずれているのもそれをよく表わしているといえよう。

3 親族・同族のつきあい

福生において、農業を中心とした生業の時代、一家における相続は長男に譲ることがほとんどで、分家（シンヤ・シntax・ブンケ）を出すことはなかなか難しかった。それゆえ、分家を出すとき、宅地一反、畑一、二反を分けてやるというが、実際には宅地とそれに家を建ててやればよい方だという。また、分家してもニワバにはなかなか入れてもらえず、何年かたつて有力者のくちききと加入金の納入で入れたと伝える。分家と本家（オオヤ・オモテ・ホンケ）の関係をイッケと呼ぶが、イッケのつきあいは結婚式にはかならず呼び、葬式には合力するし、正月には本家に半紙をもって挨拶にあがる。盆や彼岸には、本家の墓にも供物をするのが通例であった。

親類（シンセキ）は、血のつながりのある家や嫁・婿が出た家を指し、つきあいは仏事を基本にして、冠婚葬祭のときにおこなわれる。

このほか、ジシンルイ（ジルイ）という関係があるが、これは昔の親戚・血縁関係はないが、昔、土地を分けてやった家などと考えられているが判然としない。つきあいにおいては、関係が今日明確でないため家によってさまざまであるが、それでもかつては重要な間柄であったとの伝承は聞かれる。

第1節 人々のつきあいとくらし

表IV-4 N家の交際表

行事・儀礼	つき合い先	持 参 品	備 考
年 始	神社(熊川神社) 寺(真福寺) ヨメの実家 当主の世話人とハシカケ 曾祖母の実家 祖母の実家世話人ハシカケ トナリグミ	半紙の2帖、金 半紙2帖、手拭い、金 オソナへ菓子折 相手の家を考えて 持っていく物を考える	元旦に年男が行く。 3年くらいはオソナへを持参する 10軒くらいである。
やぶ入り			■ やぶ入りをやっていなかった。
三月 節句	ヨメの実家 ヨメ・ムコの世界人	ヒシモチ・ハマグリ	ヨメが行くのがふつう 上の子が学校に上るくらいまでやる
彼 岸 春 秋	ヨメの実家 寺 新仏のある家 春と同じ	ボタモチか菓子折 //	兄弟の家でも初彼岸のときは持っていく がそれ以外は持っていけない 縁の近い者が持っていく //
スストリマユダマ (4月下旬)	トナリグミのうちの 岡ドナリ	アン入りとアンの 入らないマユダマ	
春祭り(4月10日) 祭 天王様(8月1日) 秋祭り(9月1日)	どこにも配らない	赤飯を炊いたり、クサノ ハナ、マンジュウ、フカシ マンジュウをつくる	
五月 節句	ヨメの実家 両方のお世話人 お祝いを貰ったところ	カシワモチ カサゴのヒラキ1組(2枚)	学校に上るまでの間、トナリグミ、 タチイリからのお祝いはなし。
お 盆	ヨメ・ムコの実家 新仏のある親戚 寺	むかしはソウメン 今は菓子折か果物・砂糖 位はいかに米1升を入れて 持っていた 今は3000円	■ただし新盆のときだけ (ボンコといった)
成 暮	ヨメ・ムコの実家 両方の世話人 自分の兄弟姉妹	とくに決まっていなくて 菓子折が多かった	お世話人の家へはあまり長い期間で はなかった。誰が行ってもよかった。
オビトキ	トナリグミ タチイリ 神 社	紅白の丸モチ	お祝いをもらった親戚 にはもっていく
葬 式	トナリグミ タチイリ	その家との前々からの 関係を考え金を持っていく (現在トナリグミの場合で 5千円)	故人との交際のあったところから 来てくれるしこちらからもいい。
ご 祝 儀	トナリグミ タチイリ 縁の近い親戚	その家との前々からの関係を 考えて金で持っていく。 (現在トナリグミの場合 5000円)	父親や自分の兄弟、姉妹 くらいをよぶ。
見 舞 い	トナリグミ タチイリ	現在トナリグミでの 場合で5000円	親戚でも病気の状態で 考える。
法 事	トナリグミ タチイリ	同 上	故人と交際のあったところ。 親戚をよぶ
新 築 祝	トナリグミ タチイリ	同 上	自分の兄弟姉妹、子どもなどの 縁の深い親戚をよぶ。

4 その他のつきあい

その他のつきあいのなかで、注目されるものにタチイリとオヤブン（セワニン）とのつきあいがある。タチイリは、クミアイの補助的機能をもった関係で、クミアイ以外のニワバの家である。家によって、一軒もないものから四軒もある場合もあるが、その関係の成立は判然としない。タチイリとのつきあいは、結婚式での手伝い、葬式ではクミアイと同じ手伝い、病人が出たときの手伝いなどである。

次にオヤブン（セワニン）であるが、別称仲人親とも呼ばれる。オヤブんと仲人された者の関係は、オヤコの関係と呼ばれる。このオヤブンになる人は、同じクミアイの家であることが過去多くほぼ固定していたといっていが、近年はつきあいの範囲も変るなかで変化してきている。オヤブんととのつきあいは、盆・暮・正月の挨拶、祝儀不祝儀などの手伝い、それに昔は農作業の手伝いなどがあったという。

このほか、井戸づきあいとでも称されるつきあいがある。福生の多くの地区において、ポンプ井戸や水道が普及する以前、井戸を共同利用することが多かった。共同井戸は、モヤイ井戸とも呼ばれ、共同の出資ないし個人の負担によって井戸を掘り、共同利用したが、ツルベ井戸のため、井戸替えや井戸の縄ないが共同しておこなわれた。井戸替えは、南地区においては正月一七日におこない、井戸縄ないは各自がワラをもちよって、ツルベ井戸の縄ないをおこない、仕事が終ると当番の家で共同飲会をおこなった。

第二節 人生とつきあい

1 産育とつきあい

妊娠から出 妊娠したことを「子供が始まった」という。本人は二、三か月で妊娠に気づく。しかし、なかなか産まで い出せず、胎児の子返り（胎動）を感じる五か月頃、夫か姑に告げるといふ例が多い。特に妊娠がた

び重なると「まだできちゃった」という気兼ねと、「まだできたよ」といわれるのがつらくて、家族の誰かが気づいてくれるまで、隠していることが多かった。

妊婦は五か月に入ると戌いぬの日を選んでハラオビ（腹帯）別名イワタオビ（岩田帯）を締める。戌の日に締めるのは犬のお産が軽いのにあやかり、安産を願う気持からだといわれている。ハラオビの晒さらし木綿は自分で用意した人が多いが、初子のときだけ嫁の里から届けられたという人もかなりいる。普通は一反を半分に裁って二本作った。なかには縁起の良い数だからと、一丈と七尺五寸三分に裁った人もいる。初子のときは産婆さんか姑に締めてもらい、次子からは自分で締めた。こうして妊娠を確認すると、寺や神社にお参りして安産を祈願する。福生地域では尾崎の観音様（秋川市）や新町（青梅市）と高木（東大和市）にある塩釜様が信仰されていた。特に尾崎の観音様は女の神様として親しまれ多くの人がお参りしている。安産を願う気持は妊娠中の禁忌や俗信にもみられる。重い物を持ったり高い所の物を取ったりと、無理なことをしてはいけない。横むきに寝ると逆子になる。柿、コンニャク、草餅を食べると

流産する。ウサギの肉を食べるとみつ口の子が生まれる。火事をみると赤アザの子、葬式にあうと黒アザの子が生まれるといわれ、火事をみたらすぐ自分のお尻をなざれば大丈夫、葬式にいくときは懷に鏡を入れていけば災いを除くことができるといった。家の普請もひかえた。掘っている井戸を妊婦がのぞくことも嫌った。男の仕事である穴番（土葬の際の穴掘り）も、妊婦のいる家は当番を代ってもらった。反対に便所を掃除すると良い子、きれいな子が生まれるといわれた。現在のように定期的に病院や産院に通うこともなく、出産のときだけ産婆さん、もしくはトリアゲバアサンにきてもらって産むという状況の中で、お産は昔ほど命がけであった。しかし「お産は命がけ」といわれた一方で「生みはらみは病気じゃない」という考え方も強く、しかも「つわりだなんていつている暇はなかった」という生活の中で、妊婦は妊娠したことで、嫁としての仕事おろそが疎かにならないように気兼ねしながら、陣痛の始まるぎりぎりまで仕事に精を出したというのが現実である。

子供は三年目に次の子が生まれることが多く、これをミツムケー・ミツムカイといい、子供は天からの授かりものといった。しかし妊娠がたび重なると、望まない生命もあって、墮胎や、古くは間引きもおこなわれた。墮胎のことをウロヌキ（オロヌキ）といった。明治の頃は、生まれた子をすぐ処置してくれる専門のオバアサンがいて、その人のことを「ヒネリヤ」とか「オヒネツチャン」と呼んだという。間引かれた子は、ムラの一か所に埋められたと伝えられている。妊婦のことをハラミット（孕み人）といった。

出産 昭和三〇年（一九五五）頃まではほとんどが自宅出産である。「産み血を流す」といって、お産は家（婚家）でするのがあたりまえだった。産室は神棚や仏壇のない裏の奥座敷や、ナンドと呼ばれる暗い部屋が使われた。産室にはオンナシ（女衆）以外は入れなかった。出産方法は座産ざさんが一般的だった。昭和二五年にシマイツ子（末っ子）を産

婆さんの手で座産で産んだ例もある。しかし一般にはムラの中の産^うみのうまいトリアゲバアサンと呼ばれた人に、子供をとりあげてもらっていた時期は座産で、助産を職業とする産婆さんの世話になるようになってから徐々に寝産に移行していったといえる。古くは畳をあげてムシロやワラを敷き、ボロ布の上でお産した。昭和七年（一九三二）の初子と昭和一〇年の次子まで、こうして産んだという人もいる。陣痛の最中は、千手院の子育て地蔵の灯し残りローソクや、塩釜様からもらい受けてきたローソクを灯して、お産が早く無事に終わるように祈ったり、魔がささないように布団の下に刃物をおいたりした。出産後麻の紐で産婦の髪を結わえた。

お産は不浄なものと考えられ、産のけがれを「ブク」とか「チブク」といった。産の忌はオシチャまで、二日間、オビアケまでと家によって異なるが、家の中の忌はオシチャまで、家の外との交際（つきあい）はオビアケまでという考え方が多い。産後はじめてカマドと井戸を使うときは、かならず塩、酒、オサング、あるいは線香をたてて清めオカマサマ、井戸神様を拝んでから使った。家の者はオビアケ前の講の代参や日待ちの宿、井戸替え、穴番などの共同作業は遠慮した。

産後の食事は一週間は粥と決まっていた。副食は鰹節に味噌か醤油を混ぜたもの、鰹節と塩・梅干しで、粥は力が付くといわれたが、産婦はみんなひもじい思いをしたという。粥にする米と鰹節は、嫁の里から産見舞として届けられた。オシチャの日に床上げをして普通食になるが、塩気や刺激の強いものは避けた。柿・ホウレンソウは血を荒らすという。特に油気のものやソバ・ハツ頭は一〇〇日間禁じられた。昔の人は栄養状態が悪かったのでお産をする、額の両側の生えぎわが薄くなり、一目でお産したなとわかった。産後トリメ（鳥目、夜盲症）になった人もいた。

へソの緒・エナの始末　へソの緒は、新生児のへソの根元からティソク（手一束）の長さのところを、白麻の紐

で結わえ、その先を折り返してもう一度しばり、その真ん中をハサミで切る。家の建前のときにヘイグシ（幣串）を結わえた麻紐を使うとよいといわれた。ヘソの緒は綿にくるんで半紙に包み、子供の名前と生年月日を書いて保存した。後に産婆さんが桐の箱に入れてくれるようになった。九死に一生のとき、煎^{せん}じて飲ませると命拾いするから、とっておくものだといわれた。エナ（胞衣）と同じ場所に埋めた家もある。エナはアトザン（後産）、ノチザンともいって、始末の方法は家によって違う。一番多いのはトンボグチ（犬またぎ）の敷居の内側の、最初に足を踏むところに埋めて、その上に石をおく方法である。ほかには、人の足の届かないケコミの中に埋めた、墓に埋めた、庭の大きな木の根元に埋めたとさまざまだが、エナをボロ布や油紙に包んで始末するのは夫の役目だった。女子の場合は針と糸、男子の場合は筆と墨をいっしょに入れた家もある。

ウブユ ウブユ（産湯）はお産した場所にゴザを敷き、産婆さんあるいは、トリアゲバアサンが湯をつかわせてくれる。このとき嫁入り道具として持ってきたタライを、はじめて使う。ウブユの始末は床板を上げて床下に流した。湯灌の湯と産湯は、同じ床下に流すものだといわれた。畳の上に産褥布団を敷いて出産するようになり、だんだん屋敷内のアキノカタ（その年の年神様のこられる方向）に穴を掘って流すようになった。ウブ湯を一升ビンに入れて床の下においておくと、乳の出が良いといわれた。

ウブギ 子供が生まれたことを嫁の里に沙汰すると、ウブギ（産着）が届けられる。このウブギを「テカケ」ともいう。一つ身の紐付きの着物で麻の葉模様が多く、上等なものはメリンスだが、普通は木綿地で冬はネルが多い。男児は青、女児は赤で、黄色もありこれは男女児とも着た。麻の葉模様やウコン染（黄色）の着物を着せると丈夫に育つといわれている。ウブギはあまり早く用意するものではないといわれた。オビアケに親元から贈られる紋付の着物

をウブギという人もいる。

チツケ

新生児に授乳する前に、真綿を乳首のように丸めて砂糖をひたして吸わせた。またホウズキの根をもんで汁を出して吸わせ、カナババ（胎便）を出した。これをマクリという人もいる。乳の出ないときはもらい乳をしたり、スリコといって米を煎ってスリ鉢ですり、砂糖を入れて煮たものや、重湯おもゆを作ったあたえた。母乳の出ない嫁を「貧乏嫁」とか「ヤクザ嫁」といった。貧乏嫁は金のかかる嫁、ヤクザ嫁は役にたたない嫁という意味である。

産見舞

里親から一升もしくは二升の米と鰯節二本とウブギが二、三日中に届けられる。産見舞が届かないと産後の肥立ちが悪いといわれ、その都度かならず届けられた。お世話人・親類・クミアイからも届けられるが、いずれも総領（長男、長女）の場合である。お世話人は、とりあえず早いうちに、重箱一杯の米と鰯節二本を届け、オビアケまでに一つ身の着物を贈る。親類、そのほかはオシチャからオビアケまでに見舞った。濃い親類は祝い金か反物にお米と鰯節を付け、そのほかの家は、祝い金かキレ一丈でネルや木綿が多く、お世話人から贈られる一つ身の着物は、上等の物だと羽二重だが、一般にはメリンスが多かった。

誕生と祝い

オシチャとセツチン参り 生後七日目をオシチャ（お七夜）とか、古くはヒトシチャ（一七夜）とい

って赤飯、煮シメ、尾頭付で祝う。神棚に供える赤飯の上に石をのせる家もある。ウブスナ様（産土様・氏神様）に供えるのだという。この日、赤子を抱いて便所と井戸に参る。これをセツチン参りという。嫁の里から贈られたウブ着を着せ、頭の上に四つにたたんだオシメをのせて、産婆さんか姑が抱き、便所の神様と井戸神様にオサンゴと酒、あるいは線香を供える。子供をとりあげてくれた人が抱いて参るもんだという人もいる。セツチン参りをするのは、生まれた子がこれから一生世話になるところだから挨拶するのだとも、便所も井戸も穴だから、落ち

ないようにお参りするのだともいわれている。

赤子の名前もこの日に命名される。半紙に「命名〇〇〇」と書いて、神棚の下に貼る。はじめての子は祖父か父親が命名する場合が多い。何人目もの子になると、いくつかの名前を書いて長男にくじを引かせて決めたりした。この日は産婆さんにも祝い膳を出してお礼をする。礼金はとりあげてもらった家の事情により異なり、貧しい家はそれなりに、豊かな家はそれ相応のお礼をしたものだという。オシチャの祝いは総領のときから内々で祝う家が多いが、堅い家ではお世話人や濃い親類、嫁の里の母親を招いた。産婦はこの日床上げをする。一般には、産婆さんとこの日で縁切れとなる。

オビアケ 生後男児は三一日、女児は三三日目をオビアケ・ウブアケ（産明け）、ウブヤアケ（産屋明け）といって祝う。この日で赤子の産のけがれが明けるとされ、初めてムラのウブスナ様にお参りする。この宮参りを一般にオビアケといった。オビアケの着物は、嫁の里とお世話人から贈られる。男児・女児とも無地の紋付の重ねの一つ身で、かならず付紐が付いている。男児は黒の羽二重、女児は赤い縮緬で、重ねの下は柄物が多かった。いずれも総領の場合である。下の子になるとだんだん格が落ちたが、なるべく新しい着物を着せた。お宮参りは姑が赤子をおぶって一人で参った。お世話人やクミアイの年寄りがつれていってくれたり、近所の七、八歳の女の子におぶってもらって、姑が付き添っていくこともあった。神社に赤飯とお酒を供える。持参した重箱の赤飯は、残して帰るものではないといわれ、集まってきた子供たちに振舞った。この日、産見舞のお返しをする。赤飯に鯉節とお酒をつけた。半紙一帖の左下に命名した名前を書き入れ、紅白の水引をかける。これを名刺といって祝いごとのときはかならず添えた。赤飯の上には難を転ずるといって南天の葉をのせた。毒消しの役をはたすともいわれている。また、子供の祝いごとの

重箱を返すときは、子供がマメに育つようにと、大豆か小豆をひとつまみ半紙に包んでかならず入れた。

ブクが明けるオビアケ前に外出するときは、赤子の額に二か所、ナベズミをつけたたり、頭の上にオシメをのせた。額にナベズミをつけるのは夜の外出のときで、夜は魔ものが出るからだという。この日産婦は赤子を連れて、姑か夫に付き添われて里帰りする。嫁と赤子は一晩泊まり、赤子は初めて新客となるわけである。

都合でオビアケの日、もしくはその月のうちに里帰りできない場合は、ミツキガケといって、三か月目にかかるのをきらい、かならず翌月のうちに里帰りした。

ウブゲ剃り 赤子のウブゲ（産毛）は不浄毛といって、オビアケの日に姑が剃り落とす。オシチャにする家もある。ウブゲを剃るとき、後頭部のボンノクボの毛を少し剃り残しておく習慣があり、昭和のはじめ頃まで、このような頭の子をみかけたという。この剃り残したボンノクボの毛のことを「オチョンピン」といって、子供が転んだとき、ウブスナ様がその毛を引っぱって起してくれるのだという。剃り落したウブゲはヘソの緒といっしょに保存したり、屋敷内の育ちの良い木の根元に埋めた。

オクイゾメ 生後一〇〇日か一一〇日目に、お膳一式を新しく用意して、赤飯・煮シメ・尾頭付きで祝う。「お箸初め」という家もある。総領のときと同じように、どの子もきちんと祝う。膳に小石をおく家もある。

初正月 嫁の里・お世話人・親類から男児に破魔弓・女兒には羽子板が贈られる。いずれも総領のときだけである。床の間や長押^{なげし}にさして飾る。一月二〇日のエビス講まで飾って暦の良い日にしよう。お返しは、大きく切ったのし餅を三枚か五枚重ね、男児の場合は鯉節とお酒、女兒の場合はスルメとお酒を添えてくばる。

初節供 女兒は三月三日、男児は五月五日に祝う。三月の女の節供（嫁の節供）は内裏ビナ、五月の男の節供は、

鯉ノボリや内ノボリ（座敷ノボリ）が嫁の里から贈られる。お世話人、親類からは、祝い金や藤娘・汐汲人形が、五月は武者人形などが贈られる。お祝いのお返しは、三月は三枚重ねといって、三枚重ねの菱餅にハマグリ五個か七個に白酒。五月の節供は、カシワ餅か赤飯にカサゴの干物とお酒、というのが一般的である。

三月の節供を初めて婚家で迎える嫁に、里方から「贈りビナ」が届けられた。高砂人形が多いが内裏ビナの家もある。オヒナサマは一二日間は飾っておかなければいけないといわれた。一日を一月と考え、一年飾ったことになるのだという。一二日間飾ると火難にあわなともいわれている。節供の日はお返しを持って里帰りし、一晚泊まる。オビアケ前に節供を迎えたときは、祝いを一年先にのばした。

初誕生 戦前までは誕生を祝う習慣はないが、誕生前に歩き出した子に「ブツツエー餅」とか「ブッテーボタ餅」といって、お供えの形をした一升餅をフロシキに包んで、背中にしよわせ、わざと尻餅をつかせる習わしがある。早く歩きすぎるのは子供のためによくないと考えられた。また早く育ちすぎて早く遠く（死）へ行ってしまわないように、との願いがこめられているのだともいう。

成長と祝い **オビトキ** 男・女児とも数え年の七歳になると、今まで着ていた付紐の付いた着物から、付紐のない

着物を着るようになる。これをオビトキ（帯解き）といって十一月一日に祝う。このため七歳の祝いの子を「オビトキッコ」といい、この祝いを「オビトキ祝儀」ともいう。子供は七つの坂を越せば育つといわれた。また七つ前は神の子ともいった。オビトキに着る晴着は、嫁の里から贈られる。男児は木綿のカスリの着物と羽織に三尺、駒下駄、女児は緋のガス銘仙に三尺を締め、塗りの駒下駄というのが普通で、男児の場合、ウチオリの絹の黒い紋付の着物に袴、女児の場合も、ウチオリの絹に柄を染めた着物が贈られたら申し分なかったという。男・女児と



図IV-37 オビトキッコ
(大正15年)

も総領のときは、お世話人や親類、クミアイから反物や祝い金、ゲタなどの祝い物が贈られる。オビトキッコは、母親と祖母(姑)に連れられてウブスナ様にお参りする。神様に赤飯と御神酒を供える。赤飯は集まってきた子供たちに一箸ずつ振舞って、かならず重箱をカラにする。オビアケのときと同じである。神社のお参りが済むと、晴着を着たオビトキッコをリヤカー(荷車)に乗せて、みせながら里方や祝いをくれた家に、紅白の丸餅を飯台に入れてくばって回った。餅はクミアイの人に手伝ってもらって、一俵(四斗)以上ついたという家もあれば、餅はついてもらえなかったという人もいる。大勢の人に食べてもらおうという暮らしができるといわれた。オビトキがすむと子供の仲間に入れてもらえるようになるので、近所の子を呼んで赤飯をご馳走したという家もある。福生地域では三歳と五歳を祝う習慣はなかったが、三歳になるとかならず三つ身の着物を着せた。不経済だけれども、ちよつとでも着せるものだといわれた。昔は一つの集落で一軒かそこいらの、オダイジン(お大尽)でないとオビトキはやらなかったという(明治七年「八七四」生まれの人の話)。現在のように長男、長女にかぎらず、どの子も飾りたてるようになり、女兒は三歳と七歳、男児を五歳で祝うようになったのは、戦後になってからである。

子供のしつけと仕事 農家の暮らしは毎日が忙しくて、しつけだなんていっていられなかったという。しかし、人に迷惑をかけるな、物を粗末にするな、義理を欠くなど、ことあるごとにいわれ、生きていく上で必要なことを自然と身につけていった。あまりかまわないという家でも、食事の際の行儀作法は厳しく、冬で

もヒジロの回りにすわるのは年寄りか戸主だけで、子供はカッテの北側の板の間にきちっと正座して食べた。箸の上げ下ろしは特にうるさく、ご飯を粗末にするときびしく叱られた。子供が遅くまで遊んでいると「ヨドオサレ」(人さらい・悪者)がくるぞといって、日が十二天に入ったらすぐ家に帰るように教えた。川女郎や天狗にさらわれた子供の話なども聞かせた。夕方クワデンボウで焚火をかきまぜていると「火わるさするとネシヨンベンするぞ」とか、物干しの三本足の下をくぐって遊んでいると「背がのびなくなるぞ」といったが、子供を危険から守るためだという。

昔の子供はよく働いた。子守りから水汲み、カマドの煮炊き、家の内と外の掃除、カイコの世話から畑の手伝い、さらに機織りと、きりが無い。朝は朝で、それぞれ年齢にあった仕事分担がきまっていた。子守りは小学校一年ぐらいからで、学校から帰ると、おぶい紐を持って待ちかまえて赤ん坊をしよわされた。それでも家にいるといういろいろな仕事をいくつかるので、どこへでもいって遊べる子守りは、一番楽な仕事だったという。女の子はハタに足がとどくようになるとハタを織った。男子は小学校の高学年になると、麦一つとっても麦まきから、麦踏み、草取り、麦刈り、取り入れ、運び出し、後押し、ボウチ(棒打ち)、麦干し、取り込みと一とおりのことは親といっしょにした。夜はサツマや大根の切り干し切り、ワラ打ち、ワラないなどもした。現代の子供と格段の差がある。しかしそうした日常の中で、子供たちは我慢することや、生活に必要な知恵を学んだ。

成人と一人前 男子の場合、南・内出地区では長男が一五歳(戦後は一八歳)になると「名ビロメ」といって、正月七日(七草)のウタイゾメの日(集落のヒマチ)にムラ入りの披露をし、大人の仲間入りをする。「○○さんのお子さんが一五歳(一八歳)になりました。一升持ってきておりますが、これはいかがなものでしょうか」とクミアイの年番の人がお伺いすると、これを受けて中の人が「それではいただきます」と答えてくれる。名前をつけた一升

ピンを差し出すと「外にイネーデ、入れ」と声をかけてくれる。ここではじめて家（宿）の中に入り、挨拶をして座の人、一人一人に名刺代わりのお酒を注いで回る。披露後は道普請、川さらい、祭りの準備などのオテンマのときに、親の代理として出られるようになる。仕事はまだハンチク（半人前）でも、ヒロメをしていれば威張って出られたという。次男、三男は稻荷講のときヒロメをした。南・内出地区以外は二〇歳でムラ入りをやった。同じく稻荷講のときに酒一升を持っていた。仕事の面では畑のサク切りがうまくなるのもこの頃で、畑ウナイが満足にできれば一人前といわれ、ヒョウトリ（日傭取り）にいても一人前の給金がもらえるようになる。ヒョウトリは麦が終った一月から三月頃までの農閑期にいくことが多く、一日の給金は、砂利ふるいの場合、昭和のはじめで五〇銭、昭和七年（一九三二）頃で六〇銭、昭和一五年頃で八〇銭。同じく昭和一五年に百姓の手伝い七〇銭、昭和飛行機の飛行場造りが一円だった。小学校を卒業してすぐ奉公に出る者も多かった。

女子の場合は、月経がはじまると女になったといわれたが、特別祝いはいしなかった。仕事面では、カイコの糸とりから機織り、裁縫ができることが一人前の条件であり、早くて上手であることが良い嫁になる条件だった。裁縫は農業のひまな正月から三月頃の間に習うことが多く、重ねの着物が縫えるようになれば一人前といわれた。一四、一五歳で年季奉公に出た娘も多く、奉公先でも裁縫を教わった。大正四年（一九一五）に二年間の子守り奉公で、給金五円とシキセに元禄袖の着物をもらい、一六歳から三年間の年季奉公（製糸場）で給金二七円。昭和三年（一九二八）に、一四歳で川崎（羽村市）の機屋に一年のトッパライ（一年分の給料を先にもらってしまうこと）で給金一〇円、シキセは並シキセで着物だった。昭和一〇年に一四歳から製糸場に奉公、給金は一年目に二〇円、シキセは盆と暮にメイセンの反物、成績によって多少違い、永く勤めるとタンスなどをもらった。

男子は青年会、女子は処女会があり、学校をさがった一五歳から、結婚して退会するまで、集落の男女はほぼ全員加入していた。昭和二、三年頃、青年会と処女会が一緒になり青年団となった。青年学校があり、正月から三月の農閑期に女子には裁縫、男子には剣道や柔道を教えた。夜学校である。男子は青年団に入団と同時に消防団にも入団、消防や消火活動をおこなった。消防団の入団は総領（長男）にかぎられていた。

男は数え年二五歳と四二歳、女子は一九歳と三三歳が厄年^{やどし}で、男の四二歳と女の三三歳は大厄である。寺社で祈禱してもらい、お札をもらいうけてきて神棚に供え、後厄がすぎてから初午の日にお焚きあげをした。厄年は気にはしたが、わざわざそのためにお祓いをしてもらった人は少ない。長寿の祝いは六一歳を還暦、七七歳を喜寿、八八歳を米寿という。七〇歳の古希はあまり祝わなかった。長寿の祝いは、赤いチャンチャンコを着てウブスナ様にお参りして、ごく内輪にしたという人もいるが、昔は生活にゆとりがなかったから、あまり祝う家はなかったという。一般に祝うようになったのは、戦後生活が豊かになってからである。早く祝いをするると早く死ぬといわれ、喜寿をせずに米寿で祝った人もいる。

育児の俗信

捨て子 親が数え年の四二歳の厄年に生まれた子供を「厄年っ子」といって、子供を捨てる習慣があった。前もって知り合いの人に沙汰しておき、箕などに入れて辻に捨てた子を拾ってきてもらう。五男（五人目の男児）も御難^{ごなん}をさけるために捨て子の対象となったという。また一軒の家の中に巳・寅^{とら}・申^{さる}の干支が揃うと「ヌイの化物」になり、誰か一人が食い殺されるといわれ、捨て子のまねをした。昭和四年に姑が申で、長女が寅のところに、巳年の長男が生まれたという家では、長男を捨てるわけにはいかないとって、姑さんが手車に乗せられて捨てられた。帰りは自分で歩いて帰ってきたという。永昌院の絵馬に描かれているヌイ（ヌエ）の化物は頭が

申（猿）胴が寅（虎）で、尻尾が巳（蛇）の姿をしている。

夜泣き オシメを夜干しにすると夜泣きするといわれた。シヨウゲがたかるからと夜干しをきらった。夜泣きをふせぐ方法は、家の回りの四角に線香を立てた。先祖の供養をするとなおるといった。夜泣きの多くは、乳の量が、足りないのが原因だったという。

かんの虫 子供が引きつけるように泣くのは、かんの虫が強いからだと考えられた。虫封じの方法は、長徳寺で額に墨をつけてもらったり、永昌院へ子供をつれていくか、本人の身につけている物を持って行って、かんの虫を竹筒に入れて、口を麻の糸でしばって封じ込め、オカマ様の脇にぶらさげた。煙で虫をいぶり殺すのだという。また塩釜様でもらってきたお札を、子供の寝ている部屋の天井に貼ったり、なめさせた。民間療法としては、川にいるマゴタロウ虫を煎じて飲ませたり、粉にしたものをなめさせた。

ホウソウ 生後一年と小学校入学の年に、天然痘の種痘がおこなわれた。ホウソウ流しの話は聞かれなかったが、天保六年（一八三三）の長福寺（宝蔵院の旧名）の籠住連覚帖の中の上長沢の箇所、年神・荒神・水神と一緒に痘神の名も記されている。同じように中福生の項にも痘神の名がある。南の乙津家には今もホウソウの神様が祀られていて、戦中ぐらいいまでは、子供がホウソウにかかるとはかからもお参りにきた。

百日ぜき 「百日ぜき・ロミケ一五歳まで無用」とシャモジに書き、子供の名前を記入して、人の出入りするのき下の、ひさしの内側に差しておいた（本町S家）。熊川神社と加美の伊東家にはオシャモジ様が祀られていて、あがっているシャモジをかりてきて使い、治ったら新しいシャモジを倍にして返した。長沢にあるおその地蔵は、せき、できものに効くといわれた。

風邪 風邪をひきはじめたら、煎りたての温かいマメ（大豆）を半紙二、三枚に包んでひねり、家中の人の背中をなげたり、たたいたりする。使ったマメは四つ辻にある馬頭観音や庚申塔において、後ろをみないで帰ってくる。これを風邪の神の送り出しという。後ろをみないのは風邪の神についてこれないためだという。民間療法としては、焼いて黒こげにした梅干しに熱湯をかけ、そのうわずみを飲む。白ナンテンの実とキンカンに砂糖を入れて煎じて飲む。冬至の日にカボチャを食べたり、ユズ湯に入ると一年間風邪を引かないという。

2 結婚とつきあい

相手えらび 福生では結婚式のことを「ご祝儀」といって、昭和二〇年代（一九五〇年頃）までは、古い形の結婚が残っていた。時代の変化により、今はどのような形式の結婚でも自由であるが、昔の風習の一部分だけする人もある。

結婚の条件 男女とも一般的には二〇歳代で結婚する人が多かった。男は学校を卒業後仕事を身につけ、兵役を終えればいつでも結婚できた。女は「糸とり・裁縫」が重視され、家業の手伝いの合間に裁縫のけいこに通い、家事一般も親の手伝いをしつつ覚えて身につけた。お互いの年齢差、年まわり、相性も考え、血縁はなるべくさけたが、村内近隣の町村など「通婚圏」の範囲内での縁組が多かった。

恋愛 恋愛は「ナレアイ」といった。親が決める家同志の結婚が多かったので、ナレアイは世間一般に恥かしいこととされ、喜ばれず例も少なかった。ナレアイの場合もお世話人をたて、見合いのときと同じような形式をとった。

ヨバイ・ヨアソビ 明治三〇年代（一八七〇～一九〇〇）頃は、ヨバイ（夜這い）もあったという。昭和二〇年代頃までは「ヨアソビ」があった。福生の近在で、年頃の娘がいる家に、青年が数人連れ立って遊びに行った。世間話しをしたり、夜なべ仕事を手伝ったりしてお互いを観察し、気に入れば親の許しを得て結婚することもある。福生・熊川の製糸場に、信州や相模から女工さんが住み込みで働きにきており、青年たちが機屋あるきといって遊びに行った。親しくなって結婚する人もあったが、多くはなかった。

ハシカケ 男女双方のことをよく知る人が家の釣り合いを第一に考えて、始めに縁談をいい出した人のことを「ハシカケ」という。双方とも相手の様子を見聞きして、大体納得したら娘の家で見合いをする。良否を決めるのは家長の判断が主である。結婚のとり決めの最初に、ハシカケが酒一升持って娘の家に行き、縁談の承知か否かを決める。酒を受け取って、あけて酒を出せば承知である。これを「酒をひらく」という。ハシカケは双方の家でたてることもあり、双方かねて一人のときもある。ハシカケはご祝儀のときまでの世話が主で、何年も先までは世話をしなかった。

嫁もらい お世話人 正式の仲人をお世話人といった。ハシカケがすることもある。「ニワバ」の長・クミアイの顔役・親類・地主などの人を、婿方（モライ方）嫁方（クレ方）それぞれ双方でお世話人をたてた。

双方かねて一人のときもある。代々一定の家に頼むと決めている家もある。お世話人は結納、ご祝儀のときは夫婦で出席し、ご祝儀に関する一切の世話をする。結婚後両家に「もめごと」がおこったときは丸く収め、長子が七歳までは親子のような親しい交際があった。

クチガタメ 縁談が決まるとクチガタメをする。ハシカケと婿方のお世話人が、大安吉日の午前中に酒一升を持って嫁方の家に行く。親と一緒にいくこともある。嫁方でお世話人と親と娘が出て一席設ける。持参の酒を飲みかわし、

縁談の承知と婚約の確認をする。結納の相談、荷物送りやご祝儀の日取りをきめる。「結納クチガタメ」といって、結納とクチガタメを同日にするときは親類など立会人が出る。

結納 結婚を双方納得すると、大安吉日を選び結納をおこなう。午前中に祝酒を飲んでかけた。婿方（モライ方）のハシカケ・お世話人・親類代表・近所代表・お供・婿がいくときもあり、ハサミ箱に進物一揃い・結納金・帯代・菓子箱などを入れ、お供がかついでいく。ハサミ箱は部落共有のものを使った。エダル（柄樽または柳樽）に男樽・女樽を表すワラを編んだものをかけ両方に一対下げた。まず嫁方（クレ方）が世話人の家に行く。結納の目録二組用意し、帯代の入らぬ方を世話人の家に出すところもある。酒一升出すか、または酒代と菓子折を出す。世話人の案内で嫁方に行くが、直接婿方が嫁の家にいき、世話人もきておこなう場合もある。

嫁方ではお世話人・親類代表・両親・娘本人が立ち合い、接待する。進物の品々と目録は床の間に飾った。結納金は昭和の初め頃、一〇円から五〇円までが一般で、金持ちは一〇〇円くらいであった。小物代（帯代）として別に小額つけるか、半紙を台にして酒代をつけることもある。結納金を帯代とすることもあり、婿方に袴代として半額返すか、またはそっくり返すところもあった。「目録」一、勝男節（老連）一、寿留女（老台）一、子生婦（老台）一、末広（老対）一、友志良賀（老台）一、家内喜多留（老荷）「右之通り幾久敷芽出度御受納下さるべく候」と品目のあとに年月日、当方、先方の名前を書いた。結納の口上のあと、金額・品目を確めて請書を出し、酒肴でもてなした。ご祝儀の日取りを大安吉日と選び、婚約から式まで「三月がけ^{みつぎ}」になるのは嫌った。

嫁の荷物は、当日嫁の行列とともに大八車などで運ぶ場合と、ご祝儀の前に吉日を選んで荷送りする場合とあるが、荷受けのときはお世話人が立ち合う。嫁の荷物のご祝儀より以前に嫁の実家で飾って見せ、婿方でも飾って見せる。

帰って請書と袴代を婿方に渡す。袴代を式の当日返す人もある。式の取り決めに報告して酒肴が出る。この席に親類・近所クミアイの人を招き婚約披露するところもある。遠路でも一日で双方の家を往ききしておこなった。嫁の衣裳は一般にはヒツカエシという黒無地で紋があり、裾まわしが表布の引きかえしになっている着物を使った。中には三枚がさねの江戸褌の人もあった。髪は島田か丸まげに結い、ベッコウの髪飾りに角かくしで、下駄は畳付きか、後が丸いアトマルだった。婿は紋付・羽織袴で、白足袋に桐か畳付きの下駄をはいた。

ご 祝 儀 嫁迎え ご祝儀の当日、婿方から目出たいとされる奇数人数で嫁を迎えに行く。婿・お世話人夫婦・

親類代表・近所クミアイ代表で、お供は婿の兄弟か親類の若者となり、いき帰り、ハサミ箱をかついだ。ハサミ箱には、嫁方の人々への進物と、半紙に名前を書き、水引をかけた名刺代りにするものを入れていった。長男の嫁とりは人数も多く、次男以下は簡単であった。男女とも正装し、徒歩が多かったが、人力車を使う人や昭和になって電車・自動車をつかう人もあり、嫁の家に直接いか、お世話人に案内されていた。

クレ祝儀 嫁方（クレ方）の儀式を「クレ祝儀」といい嫁の家の座敷でおこなう。婿方の到着前に宴席の用意をし到着するとすぐ酒宴に入るが、嫁方の土地の流儀である。床の間を背にして正座に双方のお世話人がすわる。正座に向って左側が婿方、右側が嫁方で昔は女は男の右に出るものでないといわれた。婿方は上席から親類代表・近所隣組代表・兄弟など左側に並び、嫁方は右に並んだ。親は席にすわらない。座につくと両方のお世話人が参会者の紹介をする。座配（ザヘイ）というクミアイや親類の中の実力者が、式の進行をする。「オトリモチ」というところもある。座配の挨拶のあと茶菓または赤飯が出、やがて冷酒が出される。このとき座配が毒味をして、正座にすわっている両方のお世話人に盃を渡す。飲み終ると左右に取り結んで開く、という末広がりに目出度くということで嫁方は婿方へ、

婿方は嫁方へと冷酒がまわされ、中央でとり結ぶ形になり、盃は座配のところへくる。

親子盃 婿方が到着してすぐの冷酒による酒宴が終ると婿と嫁の親との親子盃となる。座配の口上のあと紋付羽織を着た親が真中に出てすわる。まず嫁の父が飲んで婿が飲む。嫁の母が飲んで婿が飲む。兄弟盃は長子が代表してする。親類盃も伯父・伯母など代表して盃をかわす。冷酒のあと燗酒が出され、これを「クサビの酒」という。クサビとは柱に打ち込むクサビの例えで固く結ばれる意味がある。中央の正座でとり結び、座配のところへきた盃を二の盃として、末席の座配のところから上席の正座へまわる。座は歌も出て、近所の人や仕出し屋が作った御馳走が出され、宴にもぎやかになる。終りに酔のものが出され、三の盃が末席から正座にまわされる。「ノボリヅメ」といい、正座にくると「おつもりにして下さい」と挨拶があり、そばかうどんが出る。「鶴々亀々」のうどんと、そばの「細く長く幸せがつづくように、あなたのソバがよい」と目出たい意味がある。

オタチブルマイ 嫁が家を出るとき、近所や親類の人にお別れの宴をするのをお立振舞いという。前日など前もつてする場合と、当日婿のくる前と、クレ祝儀と一緒にする場合とがある。クレ祝儀の途中、嫁はお世話人夫人か親類または近所の婦人に連れられ、ウブスナ（産土）様に宮参りしてイトマゴイをした。赤飯とお酒と「オサンゴ米」とお賽銭などを持っていく。お赤飯やお酒は神様に上げたあと、近所の年寄りや子供たちに振るまった。隣組の人々にもお別れの挨拶をする。嫁の両親は門口で見送るだけで「モライ祝儀」にはいかない。嫁の行列が婿方に着くのは夜が多かった。

嫁入り行列 嫁の出立となり、仏壇を拜んで先祖の霊に挨拶し、両親にも別れの挨拶をする。婿方から嫁迎えにきた人数より多い奇数の行列を組み、お世話人を先頭に弓張提灯をかかげていった。昼間でも提灯に火を入れた。

家によっては名前と定紋入りの提灯をつかった。

中宿 歩くことが多かった昔は、婚家が遠いと嫁が疲れるので中宿ちゆうしやくどをとって中休みをした。うち織りの上等の道中着を着ていき、花嫁衣裳はお供が持つハサミ箱に入れていき、中宿で着かえ、身じまいを直して婿方にいった。中宿は婿方のお世話人宅や親類の家を利用した。婿は一足先に家に帰り皆に知らせ、支度を整えて花嫁行列を迎えた。

添い嫁 嫁の姉妹、親類など独身の女性が嫁と同じような晴着を着て、嫁と一緒に行列をしてくる。嫁に故障が起きたとき、一時的に嫁の代りをした。大分以前に体験した人もある。嫁の行列が近くにくる頃、近所の人たちが嫁を近くの辻まで迎えに出る。このとき迎えに出た人々に酒を振舞う。これを嫁の「ムカエ酒」という。行列がくる頃は夕方か夜になるので、行列も迎えの人々も、提灯を持って迎えた。婿の家では嫁を送ってきた人たちに、ワラジ酒を出すところもある。

嫁入り道具 ご祝儀より数日前の大安吉日の日に荷物送りをすると、ご祝儀の当日に、行列より早目に婿の家に牛車・大八車などで運び、座敷に飾って近所や親類の人々に見せた。嫁の家でも荷送りする前に飾って見せた。式の前に荷物送るときは、お世話人が立合い、目録と荷物を照合し請書うけしょを出す。荷物を運んだ人々に婿の家では酒肴を出し、ご祝儀のお金を出すところもある。嫁の荷物はタンスの中の着物まで見せることもある。

嫁は自分で糸をとり、うち織りする人もあるので着物は数も多く作る。女子が生れると桐の木を植え、嫁入りのときタンスを作ったという話もある。婚約が決ったあと親類の人などが道具や衣類などお祝いとして贈ってくれることもあった。嫁の荷物として、ふとん・タンス・長持ち・鏡台・針箱・裁ち板た・張り板・たらい・下駄箱などであった。嫁はご祝儀のとき、自分の髪で島田や丸まげを結ったので箱マクラを使った。ハサミ箱の男物はコバが角ばってお



図IV-38 花嫁の荷物

り祝物を入れた。女物はコバが丸くて着がえや帯を入れた。

入家式 嫁の行列が婿の家に着くと、嫁はトンボグチ（台所の入口）に向かう。ほかの嫁方の人々は縁側から入る。

このときトンボマガギといって、トンボグチに麦ワラをタイマツ状にたばねて交差させ、火をつけて消したあと、交差したところをまたがせる。いろいろな意見があるが、嫁はどんな辛いことがあっても、しっかりがんばって立派な嫁としてやっていくという意味のようである。豆ガラを使ったり、燃した灰をサンダワラ（タワラベージともいう）の裏側にのせその上をまたがせる。トンボマガギのあと、トンボグチで婿方のお世話人夫人が立合い、嫁と姑のトンボ盃をする。両親が揃っている男女の子供がつぐ場合と、クミアイなどの近所の主婦がつぐ場合とある。嫁はトンボグチを出入りして生活するので、早くその家になじむようにと、トンボ盃をするといわれている。盃をすませトンボグチから嫁は中に入る。

モライ祝儀 婿方ご祝儀でクレ祝儀と多少差がある。

婿の家の床の間がある座敷と、しきりをはずした座敷と二間つづきに広くしておこなった。床の間を上座とし、中央に双方のお世話人が並んですわり、上座に向って左側が婿方で、右側に嫁方の人々がすわる。客人の嫁方が奥の方



図IV-39 花嫁・花婿 (大正4年)

になり、縁に近い方は婿方となった。お世話人を中心に親類代表・兄弟・クミアイ近所代表などが、しきたりどおりの順に並んだ。婿と嫁は相對してすわるが、婿の親は席には出ず婿も酒の番などして席にすわらぬことが多かった。一同座につくと、座配ざはいの挨拶により式がはじまる。まず赤飯や茶菓子または桜茶を出すところもある。冷酒のまわし方、式の進行、酒肴、口とりなど料理も嫁方とあまり変りはない。嫁方は縁に向かってすわるので、近所の人や子供たちが「嫁のぞき」といって障子に穴をあけ、嫁の顔を見たが、これは喜ばれた。

アイサカズキはご祝儀の宴の途中で婿が嫁の前にいき、とりおこなう。または別室でびょうぶをたて、おこなうこともある。両親が揃った男女の子供を「男蝶・女蝶」に頼む。大体七歳くらいからなる。お世話人がそばで指図をする。婿や嫁が持った盃に、男蝶・女蝶両方から同時に盃に酒をつぐ。嫁から先にすると、婿から先にすると、婿とある。酒をつぐときも飲むときも三回です。男蝶・女蝶が一回お酌をするたびに位置が入れ替わって、「アヤをとる」という。これを三回くりかえす。嫁から先にしたときは、婿より一回多く飲むことになる。このアイサカズキという盃事は、夫婦の固めの盃として、モライ祝儀のうちでは一番大切な儀式の一つである。

シヨクダイ(シマダイ)はご祝儀のとき、飾りものとして近所の人を作る。アイサカズキのとき、婿と嫁の間に飾る。終ったあと床の間に飾っておく。米・大根・人參や松竹梅の木枝などで、目出たいホウライサンなどを、木の盆に作る。アイサカズキが終

ってから同じ盃で、嫁と婿の両親と親子盃を座敷の中ほどに出ておこなう。酌は男蝶・女蝶の子供がする。

兄弟盃も長子がおこない、親類盃まですることもある。

タカモリメシは、一生食べることに苦労させない、という意味で嫁に食べさせる。オタカモリともいう。白米のまわりに小豆をつけたものか赤飯を高くもり、一口食べる。婿がたべることもある。盃ごとが終るとクレ祝儀と同じようにして冷酒をまわす。座配がアイサカズキを使うこともあるが、冷酒を毒味し、正座のお世話人に冷酒をつぎ、とり結んで上座より下座にまわす。吸物は嫁の着物がかわるたびに、蛤・白身の魚・海老など中身の具をかえて出した。口とり・金びら・かずのこ・そのほかの御馳走も近所の人々や仕出し屋が作り、嫁方とかわらない。燗酒がまわり無礼講となって座も賑い、三の盃が、座配の下座から上座に「ノボリヅメ」の盃がまわり、酔のものが出ると、宴も終わりに近く、嫁の茶となる。

嫁の茶 ご祝儀のときに宴の最後に嫁がお茶を出す。これを「嫁の茶」という。お茶くみ着物という上等の普段着に着がえ、茶を入れてまず仏壇に供え、婿・婿の両親・親類・近所の人など参会者に出す。正式に嫁になったことを皆に現わすのである。嫁がお茶を出し、オツモリが出されると宴も終わりとなる。オツモリはそばかうどんで、両方とも目出たいとされ、手伝いの人が作る。

前座敷・後座敷 ご祝儀の日に全部招待できないので、嫁がくる前に少し遠い親類とか、近所の人などを招いて宴を開くのを「前座敷」という。宴が終ったあと、親しい近所の人々とお勝手を手伝った人たちに、気楽に酒肴を御馳走するのを「後座敷」という。数日後、婿の友人などを招いて御馳走するのいう。お大尽では三日ぐらいつづける家もあった。

カタイル・アシイレ

結納がすみ、婚約から結婚までの間が長いとき、「ミツキガケ」など縁起が悪いとき、不幸があつたり戦争のために式があげられないときなどにした。式をあげる前に嫁が婿の家にいき、二、三日泊つたり、農事など忙しいとき手伝つたりする。数日間でも結婚生活をするので、カタイルで子供ができて、婚約してあるので世間にとがめられることもなかった。子供ができた場合は早く式をあげ、婚家に落着くようにした。経済的な理由でカタイルで婚家にいき、簡単な荷物だけ持って、そのまま婚家に入ってご祝儀をしない人もあつた。

村まわり ご祝儀の翌日、お世話人の夫人か、近所の親しい婦人に嫁が連れられて、ウブスナ様・菩提寺にお参りし、部落中の家を挨拶してまわる。このとき、名刺代りに半紙一帖を水引で結び、半紙の右上に「のし」「進上」と書き、左下に嫁の名を書いてくばつた。クミアイ・近所・親類・寺・神社と全部挨拶してまわる。村まわりするとき、嫁に日傘を差しかけるところがあるが、上を向かないでつましくするようにの意である。仲人礼はご祝儀から三日目（ミツメ）の里がえりのとき、嫁を婿の両親がつれていっておこなう。仲人礼として結納金の一割ぐらゐと酒代・菓子折を持ってお礼の挨拶にいく。お世話人の家では酒肴を用意してもてなす。次にお世話人に連れられ、酒代・菓子折を持って嫁の家にいく。嫁の家でも酒肴を出してもてなす。婿の両親は嫁を残して先に帰る。里がえりといって仲人礼が主なので、嫁は里に泊ることはできなかった。

里がえり

カミアライ 式のあと五日から一週間たった頃、カミアライといって嫁は実家に里がえりした。髪を結うのに、ピンツケの濃い油を使ったので髪の毛が落ちにくかつた。十分洗って一晩ゆつくり泊つてきた。いくときは、婿の母親が土産を持ってついていくこともあつた。

夏あがり・秋あがり

夏あがりといって、お盆の前、蚕や農作業が一段落したとき里帰りする。このとき婚家先で

「ハツカタビラ」といって、新しく着物を作ってくれたがこれを着て、ふかしまんじゅうなどの菓子を土産とし、両方のお世話人宅と実家に持っていき、一泊して帰った。嫁の実家では反物を買って返した人もある。秋あがりといつて、ご祝儀のあと最初の年だけ、晩秋蚕が終ったあと実家に帰る。嫁は一泊だけして帰ったものだった。

そのほかの里がえり 小正月の里がえりのときは、まゆ玉だんごを実家に持っていき泊って帰る。お盆の一六日も里がえりした。手ぞうめんなどの土産を持っていき、泊ってゆっくりして帰った。そのほか神社のお祭り、農繁期の手伝いなどのときにも里がえりした。里がえりは嫁にとって楽しみなもので、家の者も気持よく帰らせてあげた。

その他

嫁の贈りびな ご祝儀のあと、はじめての三月三日の節句が近づくと、実家から贈りびなとしておもに高砂たかさご（高砂のおきな、おうなの人形）を婚家先に贈った。内裏びなを贈る家もあった。子供が生まれたとき、初節供のお祝いをするが、ハシカケやお世話人は女兒ならお雛様、男児なら五月人形（武者人形）をおく。暮には破魔矢や羽子板を持っていたり、お金を包んでお祝いをした。お世話人は病気の相談・出産・祝ごとなど親と同様に面倒をみた。婿嫁は盆暮の付け届け、里がえり、正月などの挨拶をする。嫁は婿の両親・婿に連れられて、婿の親類に農閑期などを利用して「お新客」にいく。お酒や菓子折などを持って、泊らずに挨拶してまわった。婿も嫁の親類に同じように挨拶にいった。

新婚旅行 今のように、式後すぐ新婚旅行などする人はほとんどなく、昭和初期に珍しく新婚旅行をした人の話で、熱海・関西へいったそうである。記念写真も今はかならず撮るが、以前はあまり撮らなかったようである。嫁はご祝儀の翌朝から早く起き、食事の仕度などして働いた。嫁はするように躰しっけられてきたようである。

ゴザナオシ 結婚後、不幸にして夫が死んだとき、夫の弟と縁を結ぶことがあったという話で、これを「ゴザナオ

シ」といった。または弟が「ナオル」ともいう。

3 葬式とつきあい

死から通夜

人が亡くなるときには何らかの予兆があるといわれ、カラス鳴きが悪いとか、夢見が悪いなどとよくいわれてきた。人が亡くなると末期の水^{まうぎ}といって、茶碗に水を入れ割箸で綿かガーゼを水に浸し、別れをいいながら死者の口につけ、ついで晒布^{さらし}か無印の手拭い半分を死者の顔にかける。このとき北枕にして死者を寝かせ、魔除けとして鎌・ハサミ・小刀などを死者の胸元におく。猫は魔物とされ、死者に近づけないよう、物置などに入れる。

フレツギとヒキヤク 死者が出た家では、フレツギ・イイツギ・サタなどといってまず近所に知らせる。近所の人人は各戸男女一名が手伝いに出るが、なかでも死者の家の親類・イツケへ死亡の知らせと、通夜・葬式の日時を知らせるためヒキヤク（飛脚）がでる。ヒキヤクは男二人一組となっていくが、知らせを受けた家では酒肴と白米飯を出したが、今日電話の普及によって、ヒキヤクの役割りは姿を消した。

枕飯・枕団子 近所の女衆が枕飯と枕団子をつくる。枕飯は裏庭の隅で別火にして炊き、死者の使っていた茶碗に飯を高盛りにして白木の膳にのせ、死者の枕元におく。枕団子はウルチ米を洗わないでウスで粉に挽き、別火でつくる。団子は六個を少し大き目に作り死者の枕元におくが、残りの団子は竹籠に入れておき、埋葬のあと、葬家で会葬者が塩をつけて食べるが、これを死者との食い別れと呼んでいる。

湯灌と納棺

大ダライに水を入れ、あとから湯を入れる。これを逆水^{さかきみず}というが、これで湯灌^{ゆかん}をおこなう。逆水は奥



図IV-40 シャバダネ

座のタタミや床板をあげて捨てる。この後死者に経帷子きょうかたびらを着せ、頭には三角布、手足に脚絆をつけ、足には白足袋を左右反対にはかせ、桑の枝に半紙を巻いたものを持たせる。これが済むと納棺となる。棺は現在では寝棺（横棺）を用いるが、戦前までは座棺（縦棺）も用いられていた。納棺に際しては、死者の生前使用していたもののほか、六文銭を頭陀づた袋に入れ、死者の首にかけてやる。

通夜 棺の前に白布を掛けた小机をおき、線香・ロウソク・枕飯・枕団子・水を供え、その前で僧侶によって枕経があげられる。血の濃い親類が中心となって、徹夜で線香・ロウソクの灯をたやさないようにする。

通夜においては、クミアイの女衆が食事を作るが、ウドンや五目飯、それにネギとトウモロコシの汁といったものであった。

葬式

葬式のことをオトムライ・オトムレエといったが、それまでにクミアイや近所の人たちが諸準備をしておく。旗貼り・シカバナ作り・穴番・香典受付・引物の準備などで、棺台・天蓋・リュウタツは寺から借りておく。現在では葬具店より一切買うことになってきているが、すべて葬儀社にまかせることも多い。

出棺 出棺はすべて鉦かねの合図によっておこなわれる。一番ガネ・ヨセガネによって読経の始まりが知らされ、僧侶が引導いんどうを渡し、二番ガネによって参列者の焼香が知らされる。三番ガネは、いよいよ出棺の知らせで、僧侶の出立の経があげられるなか棺の蓋を小石でクギを打つ。四番ガネがなると葬列が組まれ、鉦をならして寺へ向かう。これは土葬の時代のことで、昭和四一年（一九六六）四月の土葬禁止令までつづいた。今日では出棺とともに火葬場へと向か



図IV-41 四十九の団子を入れる竹籠

う。なお出棺のあとハキダシ（掃き出し）といって、死者の戻らぬようにとホウキで座敷を清め、ダンバライ（壇払い）の準備をする。

葬 列 葬列は、以下のように組まれる。鉦ツキ（穴番から一名）・六道（前年の穴番より二名）・高張提灯（濃い

親類二名）・大幡（前年の穴番四名）・造花（消防団関係者）・生花（親類）・施主花一对（死者の身内の者二名）・シ

カバナ（身内の者で女か子供が八名）・燭台（子供二名）・香炉（身内一名）・膳（長男の嫁）・写真（次男）・位牌（施

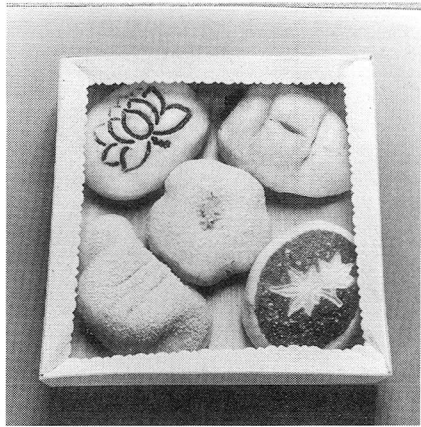
主）・棺（穴番四名）・棺側（子供たち）・小天蓋（近所の人）・僧侶・親類・一般会葬者とつづく。寺に着くと、寺の

庭を左回りで三回半まわった。

穴掘りと穴番 土葬の時代には、穴番に当たった者が事前に埋葬のための穴を掘っておく。穴番は部落中の家が順番

で五軒当る。さて穴掘りにあたっては、穴を掘る位置を葬家の人に聞き、ムシロ・酒一升・トウフ二丁ぐらいを持ち、冷酒を飲んで作業にかかる。穴を掘り終ったら、穴番のうち一名が残って番をし、残りの四名は棺を担ぐ役をする。

埋葬 葬列が到着すると、穴番の人が棺にかかった縄を鎌で切って棺を穴の中に入れ、初めに施主が土をかけ近親者につづく。このとき、枕飯・枕団子も穴の中に埋める。完全に土をかけ終ると、青竹を割って土の上を囲い、中央に石をさげるが、この囲いをシャバグネという。これは魔



図IV-42 イマサカマンジュウ

除けのためとか犬や猫の掘り起しを防ぐためという。

野帰 （野帰） 埋葬が終って喪家に帰るとき、往きとは違った道を通って帰る。喪家につくと、まず用意された桶の水で手を洗い、枕団子とともに作った団子を一つ塩をつけて食べる。また、庭におかれた逆さのウスにすわる真似をするが、現在では紙に書いたウスの絵にかわっている。

ダンバライ 野帰りが済むと、ダンバライといって、煮シメや酒、それにうどんかソバが出され会食となるが、これは親類および手伝いの人への振舞いである。若い人が死んだときは早く切りあげ、長老の場合には長くやるという。ダンバライのあと、十三仏の掛軸をかけて念仏をおこなう。

引き物 葬式の引き物としてイマサカマンジュウが利用され、それにダイビキといってヨウカンを添える家もあった。イマサカマンジュウは、米の粉で作った大きな餅で、たっぷりアンコの入ったものであった。その他、小麦粉で作られた焼マンジュウ・茶マンジュウなども用いられてきたが、今日ではシート・毛布などの衣料品が多くなった。

忌明けと年忌 葬式の日から七日目ごとに、線香・水・生花・米を持って墓に詣る。七本仏といって、小さな塔婆を一本ずつ、七日ごとに取りはずしていく。四十九日になると、忌明けとかユミアケといっ

て、僧侶を呼んで読経をあげてもらい、親類、近所の人を呼んで振舞いをする。この日、位牌を仏壇に移す。なお、忌明けが済むまでは、ボクがかかるといって神社などへのお詣りは、遠慮する。

年忌 年忌は、一年・三年・七年・一三年・三三年とおこなうが、年の事情によって異なる。三三年忌は、終いしまい塔婆とか、流れ塔婆・逆塔婆さかさうばといって、先端に杉の枝を逆さにつるした塔婆をあげ、これをもって年忌は終了する。

その他

福生には、明治の初めの神仏分離令に端を発しての神葬祭がみられる。それは、新義真言宗の大久野（日の出町）西福寺の末寺であった宝蔵院の住職が、神職に変わったためであると伝える。このため、宝蔵院の檀家は神道に変わり、葬儀も神事によるものとなった。寺は、廃寺となり観音堂と墓地だけが残り、旧檀家の位牌は観音堂に集められ、安置されている。